連載 第４回

われらが街の 誘致企業

キヤノンプレシジョン株式会社

企業の誘致認定の要件として、資本が市外にあることが挙げられます。例えば、市外に本社がある企業の事業所や、市外に親会社がある企業の子会社が市内に立地した場合、認定の対象となります。今回は、大手電気機器メーカーを親会社に持つ企業を紹介します。
■問い合わせ先　産業育成課（☎ 32-8106）

▼親会社　キヤノン株式会社（東京都大田区）
▼所在地　清野袋５丁目４の１
▼従業員数　2,187 人
▼操業開始　1973（昭和 48）年
▼主な業務　モーションコントロール（精密マイクロモータおよび制御システム）機器の開発・製造・販売、光半導体センサーの製造、レーザービームプリンタ用トナーカートリッジの製造

▼会社概要（沿革）

キヤノンプレシジョンは、キヤノングループ最初の子会社として 1952 年に設立した「株式会社目黒精機製作所」をルーツとして、1973 年に「弘前精機株式会社」の名称で弘前の地に設立されました。

▲ 会社外観

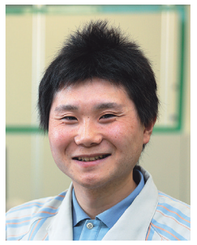
その後、グループ会社との合併を経て、2004 年に現在の「キヤノンプレシジョン株式会社」の名称となっています。主要製品はキヤノンのレーザービームプリンタや複写機のメンテナンスを容易にした「トナーカートリッジ」で、1988 年から生産しています。企業情報や製品情報など詳しくはキヤノンプレシジョンのホームページ（右記 QR コードからアクセス可能 ）をご覧ください。

レーザービームプリンタのプリントの仕組み

①帯電：感光ドラム（※１）表面にマイナスの静電気を帯びさせます。
②露光：光で感光ドラムに画像を描きます。レーザー光の照射部分は静電気がなくなります。
③現像：トナー（※２）を感光ドラムに近づけると静電気のない部分にだけトナーが付着します。
④転写：感光ドラムに用紙を密着させ、用紙裏側からプラス電荷を与えて、トナーを用紙に移します。
⑤定着：トナーが転写された用紙に熱と圧力を加えて、トナーを用紙に定着させます。

（※１）感光ドラム＝トナーを吸着して用紙に転写させる筒。／（※２）トナー＝レーザープリンタ用の粉末状のインク。

働く人からひと言！


▲ 松山和樹さん

学生時代にセンサーを使用した研究を行っていたため、センサーに関わる仕事がしたいと考えていました。自社工場でセンサーの製造・設計を行っていることを知り、専攻分野を生かせる仕事ができると思い入社に至りました。

私が現在担当している業務は、「機器がどの程度動いたのか」を検知する「エンコーダ」という電子部品の開発設計です。身近な製品ではロボットアームの関節角度制御に使用されています。その他、幅広い開発業務に携わっています。

開発に関わった製品が世界中で使用され、人々の役に立っていることに対して一番やりがいを感じています。チームメイトと互いに切磋琢磨（せっさたくま）しながら、業務を通じてたくさんの知識や経験を積み重ねることができるので、自己の成長を日々実感することができます。私には世の中の役に立つ製品を作りたいという目標があり、自身が成長した分、世の中の役に立つ製品を開発することができるという信念を持って業務に取り組んでいます。

博物館のお宝拝見

市立博物館が所蔵するお宝を、毎月紹介します。
■問い合わせ先　市立博物館（☎ 35-0700）

第９回　銅鐘（嘉元鐘）拓本

市内の長勝寺に、「嘉元鐘（かげんのしょう）」と呼ばれる鎌倉時代の銅鐘（〈どうしょう〉、国指定重要文化財）があります。この嘉元鐘の拓本（複写したもの）が今回紹介するお宝です。

津軽地方には古くから人が住んでいましたが、文字で書かれた記録はあまり残されていません。また、文字は紙に書かれるだけではなく、金属や石に刻まれて後世に伝わることもありました。この鐘には寄進した武士たちの名前が刻まれており、津軽の土地を数百年前に歩いていた人たちの身なりや顔つきが想像されます。

武士たちの筆頭の名前は崇演（すうえん）です。この人物の俗名は北条貞時といって、鎌倉幕府の執権（しっけん）でした。元寇（げんこう）で有名な北条時宗の息子でもあります。鎌倉時代の津軽地方は、幕府の最高実力者である北条氏嫡流の所領でした。崇演に続く何人かの名前は有力御家人の一族のようです。彼らは関東に居住しながら、津軽地方には代官を派遣していたのかもしれません。次に、在地の領主たちの名前が現れます。まず、中世の津軽を語る上で欠かせない津軽安藤氏と思われる名前があります。その次は曽我物語で有名な曽我氏の一族と思われる名前です。この人物は、幕府滅亡後に北条氏残党として朝廷の軍勢と戦ったようです。古い記録に断片的に姿が見える武士たちは、見事な鐘を鋳造（ちゅうぞう）するために心を合わせ、津軽の地の平和を祈念していたのでしょう。

弘前の偉人たち

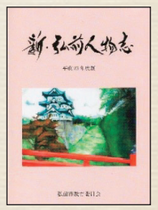
市教育委員会が発刊している「新・弘前人物志」から、弘前が生んだ偉人たちを毎月紹介します。皆さんが知らなかった偉人と、出会えるかもしれません。
■問い合わせ先　教育センター（☎ 26-4803）

第９回　リンゴづくりの貢献者

菊池楯衛（1846 年-1918 年）

楯衛（たてえ）は 1846（弘化３）年、武士の成田滝弥（たきや）の子として鷹匠町に生まれました（後に菊池家の養子となる）。幼少期から、武芸よりも草木の世話を好む少年でした。

1875（明治８）年、政府は殖産興業として米国産のリンゴの苗木を全国に配り、試験栽培を実施。当時の青森県庁には農業の担当者がいなかったため、租税課に勤める楯衛が苗木を庁舎の庭に植えたことが、リンゴとの出会いでした。楯衛はわずか３本の苗木を翌年には 230 本に増やして県内各所に栽培を広め、青森県の気候がリンゴ栽培に適していることを発見。第１回リンゴ品評会（現在の青森県りんご品評会）を私費で開催し全国に広めるなど、青森県がリンゴの主産地になる基礎を築きました。また、1882（明治 15）年には、荒れ放題になっていた旧弘前城にソメイヨシノの苗木千本を植樹し、現在日本一と言われる「弘前公園のさくら」のさきがけとなりました。

楯衛はリンゴ栽培技術の発展や生産者指導に尽力を続け、73 歳で一生を終えました。最勝院には楯衛をたたえる頌徳碑（しょうとくひ）が建てられ、今もその功績を伝えています。

「弘前人物志」は、弘前が生んだ傑出した人物を中学生の皆さんに知ってもらいたいという目的で、1982（昭和 57）年に初めて発刊されました。紹介した人物をもっと詳しく知りたい人は、「新・弘前人物志」をぜひご一読ください。